

Title	ウィリアム・テルとハムレット：『罰せられた兄殺し』のドイツ里帰り公演について他
Sub Title	Wilhelm Tell und Hamlet-2 Berichte über die Nachklänge meiner früheren Arbeiten
Author	宮下, 啓三(Miyashita, Keizo)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2006
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.23 (2006. 3) ,p.30- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	寄稿論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20060331-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィリアム・テルとハムレット

『罰せられた兄殺し』のドイツ里帰り公演について他

宮下啓三

1. 2005年のウィリアム・テル

若い後輩たちの真摯な努力とその成果によって『研究年報』が充実の度を加えているのは嬉しくもあり頼もしくもあります。私は現在進行形の「研究」を若い世代に譲って、自分の過去におこなった研究と翻訳が2005年にどのような結果を得たかということについての報告をさせていただきます。研究が一個の点で終わらずに変容と成長を保って持続するものであることの実例を供して、文字通りの「報告」にしたいと思うからです。

私のドイツ文学研究は一言で言い表せない展開をとげました。それは若かった頃にはまったく予想しなかった道筋を描きました。それでも、出発点となったものが根となり、その上に幹が形成されたのであって、すべての仕事の一つの幹から分かれて出た枝にすぎない、と私は信じています。その幹とは、レッシングからゲーテとシラーを経て現代に至るドイツ演劇の研究であり、これと関係がないかのように思われているスイス史とスイス文学の研究（たとえば、『孤独なオベリスク』「Neue Stimme」所収、1968年刊、『スイス・アルプス風土記』白水社、1978年刊、他）にしても、スイス演劇の動向を探る課程でその歴史的な背景を知ろうとする意志から発展したのでしたし、グリム兄弟の昔話集を含むメルヘンのジャンルに踏み入っておこなった著述（『メルヘン案内』日本放送出版協会、1982年刊、『メルヘンの履歴書』慶應義塾大学出版会、1997年刊、他）も、もとはと言えばウィーン民衆劇について語るための場として演劇史とは異なる枠組みを得たかったからでした。さらに、ドイツでの現象だけを見ていたので

あつてはドイツの文学も演劇も理解しきれないという思いからシェイクスピアの劇作術と文体を比較の対象にしてドイツ戯曲の歴史を見直す作業にとりかかったのですが、実行はきわめて困難であつて、何度も暗礁に乗り上げました。行き詰まり状態から脱出するきっかけを偶然に得られたのは、スイス現代文学研究を目的としてスイス滞在の機会をあたえられた時、思いがけない形で、ドイツ文学史で定説とされてきた時期よりずっと早くにシェイクスピア風のドイツ語の戯曲の出発点がチューリヒで印されていたことを知る機会が得られたからでした。ボードマーが、レッシング世代のシェイクスピア発見よりはるかに早く、チューリヒでシェイクスピア劇の文体で歌劇台本を書いていたという事実は、ドイツ戯曲史のどこにも示されていないことでした。この驚きに満ちた事実との出会いがなかったなら、私のドイツ戯曲の文体の研究『十八世紀ドイツ戯曲のブランクヴァース』（慶應義塾大学言語文化研究所、1984年刊）は挫折してしまつて執筆にさえいたらなかったでしょう。このブランクヴァース戯曲史でシラーの『テル』が重要な帰結点となりました。

時は1970年代前半にさかのぼります。日本独文学会とゲーテ・インスティトゥートの共同主催によるドイツ文化ゼミナールが長野県下で、「文学における啓蒙的傾向」というテーマで開催されました。私は全体集会での講演を求められ、日本の啓蒙期とされる自由民権運動時代のドイツ文学の受容について語りました。シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』が、専制的な他国支配の政治の重圧に抵抗するスイス農民を描いたものとして、民権思想家たちの作った歌の主題となり、これに呼応して『テル』の翻訳が試みられ、あまつさえ歌舞伎劇化されてシラー没後100年目に東京で演じられたことなどについて述べたのでした。そのゼミナールのためにドイツから招かれた批評家ハンス・マイヤー(Hans Mayer)氏に講演原稿を進呈しました。ドイツに戻ったマイヤー氏が『ディー・ツァイト (DIE ZEIT)』紙に日本での合宿の様相について詳細に報告して、私の講演からの引用をしめくくりに使いました。この反響に逆に刺激される形になって私は日本とドイツで同時発行された学術誌にこの講演を発表しました(“Wilhelm Tell für die Schule der gescheiterten Demokratie“, ‚Kultur und Erziehung‘ Heft 2, 1977年刊)。これを基盤としてテル伝説の誕生の由来とシラーの戯曲の影

響などについて一冊の書物をするすに至りました。それが『ウィリアム・テル～ある英雄の虚実』（日本放送出版協会、1979年）でした。スイスにおける伝説の成長の歴史をさかのぼると同時に、明治から昭和に至る日本でのテルのイメージについて調べた結果を報告する章をふくんでいました。

2005年がシラーの没後200年目にあたっていました。それに呼応する出版物としてスイスのジュネーヴでウィリアム・テルを主題とする大著が出版されました。著者はアルフレート・ベルヒトルト（アルフレッド・ベルシュトル Alfred Berchtold）氏。1925年にチューリヒで生まれた人ですが、1944年からジュネーヴに住み、スイスの文化史にかかわる多くの著述で知られている作家です。2年前に人を介して新著のために日本でのテル受容史についての私の出版物の提供を求められました。その人の『ギヨーム・テル～抵抗者かつ世界市民（Guillaume Tell. Resistant et citoyen du monde）』が、私の書いたものを基礎として日本におけるテル受容を4ページにわたって語っています。私の仕事が世界的な視野でのテル像の比較研究に寄与できたのは嬉しいことです。

これに至るまでにもう一つ別の伏線がありました。2000年2月にベルン大学公法研究所の依頼で私が日本におけるルソーの受容についての講演をおこないました。それは『中江兆民——日本のルソー（Chomin Nakae — Der japanische Rousseau）』という題でした。ルソーの『社会契約論』を初めて翻訳した他、明治時代の日本でルソー思想の紹介に大きな寄与をおこなった中江兆民は、かつてベルン大学教授であった人から留学先のパリでこのジュネーヴ出身の思想家の考え方を知ったといういきさつがありました。さらに中江兆民は大国への道を歩もうとしていた日本に対してスイス式の小国のあり方を説こうとしていました。兆民のルソー観およびスイス観を語る講演の中でテル受容にもふれました。この講演の全文がベルン大学法学部の、講演の依頼者であったアンドレアス・クライ（Andreas Kley）教授のホームページで検索できるものとなりました。前述のベルヒトルト氏が私にテル受容についての資料提供を求めた直接の契機はこのインターネット情報にあったと推測されます。なお、この講演の稿は2005年2月発行の『帝京大学 外国語外国文学論集 第11号』に収録されました。

2. ドイツ製のハムレット劇の日本人によるドイツ公演

2005年6月、私の翻訳したドイツの戯曲が、ドイツの二つの都市の劇場で、日本人の劇団によって日本語で上演されました。

18世紀のドイツで名優とうたわれ、古風な大時代がかった演技術を心理重視の近代的な芸風に改めさせる機運を作ったとして特筆されるのがコンラート・エクホーフ (Konrad Ekhof, 1720~1778) です。この人がドイツ版ハムレット劇の台本を所持していました。『罰せられた兄殺し、又の名：デンマーク王子ハムレット (Der bestrafte Brudermord oder Prinz Hamlet aus Dänemark)』と題された作品です。ドイツでシェイクスピアの名が伝わる以前に、イギリスから来た俳優たちが持ち込んだハムレット悲劇のドイツ語版とおぼしいのですが、上演記録がつまびらかでない時期のこととて、誕生のいきさつも含めてすべてが謎のままです。大げさな悲劇調に道化の悪ふざけを加味したものであって、もとよりシェイクスピア悲劇から文学性をそぎ落としたような、荒削りな劇の台本です。

そもそも18世紀のドイツ演劇は、ライプチヒを牙城とするゴットシェートとその周辺の人々のフランス古典主義演劇の様式を模倣する運動に始まって、これを批判してシェイクスピア演劇の手法への路線転換を誘導したのがレッシングでした。後者の路線を青年期のゲーテとシラーが継承した後、両者とも古代ギリシア演劇以来の伝統とシェイクスピア流儀を中和させる段階、つまり古典主義演劇への回帰の次元に到達しました。ゴットシェートからゲーテまでのドイツ戯曲の展開は、(フィッシャー＝リヒテ教授の言を借りて言えば)「演劇の文学化」という意味で一貫性をもつ動きでした。17世紀末か18世紀初期に作られたとおぼしい『罰せられた兄殺し』はまさしく文学化される前のドイツ演劇の水準と様相を反映するものでした。当然のごとくに文学史や戯曲史で取り上げられることがありませんでした。

しかし、見方を変えれば、文学性を欠くがゆえに、演技本位の演劇の原点に立ち戻る機会をあたえてくれるかも知れない、と私は思いました。そもそもこの台本は、イギリス本国のシェイクスピア学者の間では『ハムレット』の原型として重要視されてきました。シェイクスピアより前に別人

が作ったものを反映するのか、それともシェイクスピア自身の作品の初期の形を示すものであるのか、研究者の間で一致した見解が構成されるに至っていません。その委細についてはすでに紀要（『「兄殺しの報い」と「ハムレット」～18世紀ドイツの巡回劇団版ハムレット悲劇について』「慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学 第28号」1999年）で論じているので、この台本の演劇史的意義を繰り返して語ることはひかえます。

18世紀ドイツ演劇とシェイクスピアの関係についての資料を渉猟する過程で私はヨーゼフ・キュルシュナー（Joseph Kürschner）編の『ドイツ国民文学（Deutsche National-Litteratur）』に収められた『罰せられた兄殺し』に遭遇し、興に駆られて日本語に訳していました。そのことを知った劇団俳小（はいしょう）が上演を申し出ました。俳優座の流れを汲む中堅の劇団です。1998年9月、池袋演劇祭参加公演作品として、東京都内の小劇場で初演され、若手俳優たちの熱演によって優勝の栄を得ました。日本の地方回りの一座が演じるという外枠を演出者である志村智推氏が考案しました。和風の旅回り劇団が劇場に到着して、一気に西洋悲劇の世界に早変わりするという趣向ですが、台本そのものは忠実に再現されました。『どさ回りのハムレット』という題でした。翌年、前年度の受賞を記念する再演が池袋芸術劇場小ホールでおこなわれました。その後、短くて筋がわかりやすいという理由でシェイクスピアの『ハムレット』への入門にしたいという高校が複数あって、それらの学校に劇団が出張して演じました。

2005年6月、国際交流基金の支援を受けて劇団俳小がこの劇をもってルーマニアで1ヶ所（シビウ市）、ドイツの2ヶ所（ウルム市とゴータ市）で、初演時の演出を踏襲して日本語で上演しました。ドイツ語台本の所持者であったエクホーフが俳優人生最後の時期を送ったのがゴータ市であり、その劇場がエクホーフ劇場の名をもつことを理由として私がゴータでの上演を勧めたのでした。ルーマニアのシビウ市とドイツのウルム市では客席を埋めるに至らなかった由ですが、ゴータでの2度の上演は、ドイツ語の台本を字幕としてスクリーンに投影したことも役立って、満員の観衆から熱狂的な反響を受けることができました。地元では「エクホーフの里帰り」として歓迎されました。2005年7月14日付けの『朝日新聞（夕刊）』にそのことが写真入りで報告されました。

日本語を知らないヨーロッパ人たちの前で日本語で上演することにどれほどの意味があるか、という根本的な疑問については、多々議論の余地があるでしょう。しかし、シェイクスピアの深刻で哲学的な独白をすべて消し去って早いテンポで展開されるドラマが、日本語独特の発声法、そしてデクラメーション（せりふ術）と身振りが、ともにドイツ人たちには「歌舞伎風」と受け取られて、そのことによって17世紀末か18世紀初頭に書き取られたとおぼしいドイツ語の大衆版ハムレット悲劇が「異化効果」を発揮した、と感じられたようです。当地の人々にとって意義のある体験として評価されたのは、そのためであったと思われます。

なお、ドイツでの4回の公演は „Hamlet im Wandertheater – der bestrafte Brudermord“ というドイツ語タイトルを付しての上演でした。

6月13日と14日 ウルム・ロクシー劇場 Roxy-Theater (Ulm)

6月17日と18日 ゴータ・エクホーフ劇場 Ekhof-Theater im Schloss Friedenstein (Gotha)

ゴータでは「エクホーフ・フェスティバル (Ekhof-Festival)」の幕開きの出し物とされました。当地の新聞 (『テューリンガー・アルゲマイネ (Thüringer Allgemeine)』紙は「エクホーフが250年ぶりに日本から里帰りする」との見出しで大きく報道しました。ただし、この数字はエクホーフの活動期からの起算であって、『罰せられた兄殺し』の成立の推定年代から数えれば優に300年ぶりの帰還ということになります。

(帝京大学特任教授、慶應義塾大学名誉教授)

Wilhelm Tell und Hamlet

— Berichte über die Nachklänge meiner früheren Arbeiten

MIYASHITA, Keizo

1. Wilhelm Tell im Fernen Osten

Anlässlich eines von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik und dem Goethe-Institut Tokyo veranstalteten Kulturseminars in den 1970er Jahren, das sich mit den aufklärerischen Tendenzen in der deutschen Literatur beschäftigen sollte, hielt ich einen Vortrag über den Schweizer Nationalhelden: „Wilhelm Tell für die Schule der gescheiterten Demokratie“ (gedruckt 1977). Es handelt sich um eine Phase der Rezeptionsgeschichte der deutschen Literatur in der japanischen Aufklärungszeit, d.h. der Meiji-Zeit, in der Schillers Schauspiel „Wilhelm Tell“ nicht nur das allererste deutsche Drama war, das je ins Japanische übersetzt worden ist, sondern auch das erste, das an die japanische Bühne gelangt ist. Im 100sten Todesjahr Schillers wurde das Drama stark bearbeitet in einem Kabukitheater in Tokyo aufgeführt. Hans Mayer, sehr wahrscheinlich der brillianteste deutsche Literaturkritiker von damals, war als Gast aus Deutschland dabei. Er berichtete kurz danach in der „ZEIT“ über die Literatur-Tagung und zitierte am Ende aus meinem Tell-Vortrag. Dieses Echo ermunterte mich dazu, aus jenem Referat zu einer buchförmigen Monographie zu erweitern: „Wilhelm Tell. Dichtung und Wahrheit eines Helden“ (1979). Jahre später nahm das Schillersche Tell-Drama als das letzte Kapitel meiner „Geschichte des Blankverses in den deutschen Dramen im 18. Jahrhundert“ (1984) einen besonders wichtigen Platz ein, nicht allein im theatergeschichtlichen Zusammenhang, sondern auch in Bezug auf meine anderen Arbeiten über die Schweizer Literatur- und Kulturgeschichte („Die kulturelle Geschichte der Schweizer Alpen“ 1977; „Die 700jährige Schweiz“

1991). Und im Jahr 2005, 200 Jahre nach dem Tod Schillers, erschien in Genf ein dickes französischsprachiges Buch: „Guillaume Tell. Resistant et citoyen du monde“ (Editions ZOE). Diese neueste Tell-Monographie hat ein bewunderungswerterweise breites Blickfeld und erzielt eine kultur- und sozialgeschichtliche Analyse der Tell-Kult inner- und außerhalb der Schweiz. Der Verfasser, Alfred Berchtold, erweiterte seinen Blick auch auf den Fernen Osten und zitierte aus meinem Buch mehrere Stellen. Außerdem widmete er meinem Buch einen besonderen Platz, indem er daraus in Originalform nämlich im Japanischen abdrucken ließ. Mein Vortrag „Chomin Nakae — Der japanische Rousseau“, der von dem Institut für Juristik der Universität Bern im Februar 2000 veranstaltet wurde, hat auch einen thematischen Zusammenhang mit dem Tell-Motiv. Der Vortrag ist inzwischen gedruckt worden in einer Publikation der Teikyo-Universität („Beiträge zu fremden Sprachen und Literaturen“ Nr.11, 2005).

2. Ein deutsches Hamlet-Stück auf Japanisch in Gotha

Die Wurzel sowie der Stamm meiner germanistischen Forschung ist die deutsche Dramatik seit der Lessing-Zeit. Alle andere Themenkreise wie Schweizer Literatur- und Kulturgeschichte oder Geschichte des deutschen Kunstmärchens sind nichts anderes als Zweige aus demselben Stamm gewesen. Und mein Hauptwerk, „Geschichte des Blankverses“ hätte nicht entstehen können, falls ich mich nicht anlässlich meines Studienaufenthalts in der Schweiz, der eigentlich einer Forschung der gegenwärtigen Schweizer Literatur gewidmet werden sollte, fast zufällig darüber informieren konnte, dass Bodmer, einer der in der deutschen Literaturgeschichte „Schweizer“ genannten Literaten, schon Jahrzehnte früher einen jambischen Opentext verfasst hatte als Wieland oder Weisse. Die Beziehung des Shakespeareschen Dramenstils zur deutschsprachigen Schauspielkunst wurde dann (es war im Jahr 1973) mein wichtigstes Thema. Im Laufe der Beschäftigung mit diesem Thema interessierte mich ein merkwürdiges Stück: „Der bestrafte Brudermord oder Prinz Hamlet aus Dänemark“, das in einem Band der „Deutschen Nationallitteratur“ abgedruckt steht. Es geht um ein Trauerspiel mit Harlekinade und Haupt- und Staatsaktion, dessen Manuskript zum Besitztum

Konrad Ekhofs gehörte. Das Stück beginnt mit einem Vorspiel, wie es vor Shakespeare in den englischen Dramen üblich war. Unter den Shakespeare-Forschern wird das Stück als eine „Ur-Hamlet“ angesehen. Kurze Szenen hintereinander und ohne philosophierende Monologe. Fast gradlinig läuft die Handlung vom Anfang bis zum Ende. Dieses Stück hatte ich fast aus Spaß ins Japanische übersetzt. Eine der Tokioter Theatergesellschaften zeigte mir Interesse daran. So kam es zur japanischen Erstaufführung im Herbst 1998 und im nächsten Jahr zu einer Wiederaufführung. Auf meinen Rat gastierte im Juni 2005 dieselbe Theatergesellschaft „Haisho“ in Deutschland und Rumänien. Im Ekhof-Theater in Gotha und in Ulm, je zwei Male, wurde das Stück im Japanischen gespielt. In Gotha, wo Ekhof, der Vater der deutschen Schauspielkunst, seine letzten Jahre verbracht hatte, wurde das Gastspiel der Japaner als Rückkehr Ekhofs mit heisser Begeisterung begrüßt. In Gotha wurde der deutsche Text auf einer Videoleinwand offeriert. „Die Thüringer Allgemeine“ annoncierte mit großen Schlagzeilen die dortige Aufführung: „Die Heimkehr. Japanische Ensemble bringt zum Ekhof-Festival-Auftakt ein Stück von vor 250 Jahren zurück nach Gotha.“